

【重点目標1】 学習指導：創造的思考力を育むとともに、データやデジタル技術を活用して、グローバル社会で求められる資質・能力を育成する。

具体的取組	担当	現 状	評 価 の 観 点	実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準	判 定 基 準	備 考
① データを活用することで、生徒の論理的な思考力や批判的な思考力を育成する。そのための授業の工夫を促し、研究授業等の機会を設けることで、工夫について教員間で共有する。	教務課 各教科	R6年度11月の生徒アンケートにおいて「論理的に考えたり主張するためにデータを活用したりすることができる」の問いに対して「よくあてはまる」または「おおむねあてはまる」と答えた生徒が75.8%であった。STEAM教育の理念にもとづき、文理の枠を超えて多面的・多角的にものごとを吟味する思考力を育成するための授業の工夫に取り組む必要がある。	【成果指標】 生徒がデータを活用することで、ものごとを様々な視点・立場から吟味しながら論理的に考えることができる。	「論理的に考えたり主張するためにデータを活用したりすることができる」の問いに対して「あてはまる」または「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：90%以上 B：85%以上 C：75%以上 D：75%未満 昨年度75.8%	C以下の場合は、結果を分析し、改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (学校評価アンケート)
② 学習や部活動・学校行事などの機会を活用して、「振り返り」を導入することによって、生徒一人ひとりが自らの課題を設定し、克服しようとする力を育む。	教務課 各学年 各教科	真面目で素直な生徒が多い。年々主体的に行動できる生徒は増えつつあると感じられる。その一方で、学習や学校生活の場面で教師等の指示を待つ受け身な生徒も多いため、自ら課題を設定し見直しをもって改善に取り組む力を高める必要がある。	【満足度指標】 生徒が学校生活において、何をすべきかを自分で考え主体的に行動している。	「学校生活において、何をすべきかを自分で考えて主体的に行動している」の問いに対して「よくあてはまる」あるいは「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：90%以上 B：85%以上 C：75%以上 D：75%未満 昨年度89.2%	C以下の場合は改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (学校評価アンケート)
③ 適切な発表技術等を生徒に教えるとともに、自分の意見や調べたことを発言・発表できる場を授業や学校行事で設定する。	教務課 各学年 各教科	R6年度学校評価生徒アンケートにおいて「授業を通して表現力が高まった」と答えた生徒が88.6%とR5年度(88.8%)より若干下降した。高い水準は維持されているものの、より効果的な場の設定が必要である。	【成果指標】 生徒が必要な場面で積極的に発言・発表することができる。	「授業を通して表現力が高まった」の問いに対して「あてはまる」または「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：90%以上 B：85%以上 C：75%以上 D：75%未満 昨年度：88.6%	C以下の場合は改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (生徒による授業評価)
④ 生成AI等のデジタル技術を活用した授業やデータを活用した課題研究等の探究活動を通して、創造的思考力を育む。	情報メディア課 SSH企画室 各教科	R7年度よりSSH文理融合基礎枠の指定を受けた。生徒が科学的アプローチを用いて社会課題解決を探究することを通して、創造的思考力を育むことを研究開発課題として取り組んでいる。	【成果指標】 生徒が生成AIやデジタル技術を活用した授業や探究活動を通して、自ら考え、課題を探究し、学びを深めることができる。	①「生成AIやデジタル技術を活用した授業や探究活動を通して、自ら考え、課題を探究し、学びを深めることができた」の問いに対して「よくあてはまる」あるいは「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：75%以上 B：60%以上 C：55%以上 D：50%未満 新しい質問項目 ②「授業や探究活動を通じて、新しいアイデアを考えたり、自分の考えを表現したりする創造的思考力が高まったと感じる」の問いに対して「よくあてはまる」あるいは「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：75%以上 B：60%以上 C：55%以上 D：50%未満 新しい質問項目	C以下の場合は改善策を検討する。	7月・12月に調査。

【重点目標2】 進学指導：生徒の進路意識の成熟を促し、高い目標を強い意志をもって実現する生徒を育成する。

具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準	判 定 基 準	備 考
① 将来にむけて、一人一人のキャリアビジョンの発達を促すため、さまざまな進路行事を通して、文理選択や学部学科選択、将来について広く考える機会を設ける。3か年を通して、系統だったキャリア教育を、時宜を得た適切なかたちで行う。	進路指導課 各学年	現3年生の1年次より系統立てたキャリア教育を再構築し、1年生に対しては、適切な時期に実施できている。2年生については、キャリアを考える機会が設けられているものの、より効果的で充実したものとして生徒のキャリアビジョン形成の機会とするためには、1年生同様に系統立ったキャリア教育として再整理する必要がある。	【成果指標】 将来について、キャリアビジョンを有する生徒数の割合。	全学年、「前より自らの将来のキャリアについて深く考えるようになった」と答える生徒が A：75%以上 昨年度 B：60%以上 A：52.4% C：55%以上 B：40.0% D：50%未満 合 計：92.4%	C以下の場合は、結果を分析し、改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (学校評価生徒アンケート)
② 保護者懇談や保護者対象の進路説明会、生徒への面談を通して、生徒の進路に関して保護者と十分情報交換を行い、信頼関係を築く。 特に3年生の保護者には5月及び8月に進路説明会を行い、新課程入試について、本校の実績を踏まえて説明する。1年生の保護者には、7月に進路説明会を行い、文理選択に対する十分な情報提供を行う。	進路指導課 各学年	入試変化期を迎え、近年の入試制度改革の動向や教育改革について、情報を共有し、保護者にも理解を求め、生徒・教員・保護者が一丸となり、進路実現に向けた取り組みを推進する必要がある。 新課程入試に対応するため、保護者にも理解を浸透し1年次の文理選択の際に、保護者・生徒ともに、見通しをもち、強い志望をもつことが求められている。	【満足度指標】 保護者が満足できる進路指導、情報提供がなされている。	「本校の進路指導や保護者への情報提供は適切であるか」の問いに対して「よくあてはまる」または「おおむねあてはまる」と答える保護者が A：90%以上 昨年度 B：80%以上 A：27.0% C：70%以上 B：65.0% D：70%未満 合 計：92.0%	C以下の場合は、結果を分析し、改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (学校評価保護者アンケート)
③ 担任の生徒面談や、学年集会・進路講演会・進路説明会等の各種進路行事を有効に活用し、生徒の現状を把握し、生徒の意欲を高めるとともに、具体的にやるべきことを明確にし、共有する。 難関大志望者に対し、2年次から、意識づけ・学習サポート・集団づくりを進路指導課・学年団で連携し、早期から取り組む。	進路指導課 各学年	担任は進路志望調査や学習時間調査、試験結果等に基づき面談を重ね、生徒の進路意識を高めている。 高い志望を掲げる生徒は多いものの、その実現のための具体的な取り組みが不十分な生徒が多く見られる。 生徒の意識を高め、安全志向になりがちな意識を変え、可能性を広げるために、覚悟をもった生徒を継続的にサポートし、集団として高い目標を維持する必要がある。	【成果指標】 難関大（北大、東北大、東大、名大、京大、阪大、九大、科学大、一橋大、神大、医学部医学科）または金沢大が第1志望である生徒数の割合。	①3年生の9月段階で難関大・金沢大を志望する生徒が A：65%以上 B：60%以上 C：55%以上 D：55%未満 昨年度：61.7% ②3年生の9月段階で、生徒の学習時間（授業以外）の平均が A：週45時間以上（平日5、休日10時間換算） B：週34時間以上（平日4、休日7時間換算） C：週27時間以上（平日3、休日6時間換算） D：週29時間未満 昨年度：週37.6時間以上	C以下の場合は、結果を分析し、改善策を検討する。	3年9月の進路志望調査、学習時間調査。
④ 生徒個々の志望や学力にあわせた、各大学に応じた入試対策を補習や個別添削指導を行い、進路実績の向上を図る。 近年入試で求められる情報処理能力や表現力、思考力を高める授業へと各教員が改善する。	進路指導課 教務課 3学年 各教科	昨年度の現役合格者数は金沢大82名（既卒含む86名）、難関大は30名（既卒含む38名）であった。 難関大と金沢大の現役での生徒の進路希望の実現はともに目標に達している状況である。	【成果指標】 難関大と金沢大の現役合格者数	現役合格者数が 金沢大80以上、難関大30以上 A：両方を満たす B：どちらか一方を満たす 金沢大70以上、難関大20以上 C：両方またはどちらか一方を満たす D：両方を満たさない	C以下の場合は、結果を分析し、改善策を検討する。	年度末に集計。

【重点目標3】 生徒指導・部活動：人間形成に主眼をおいた生徒指導を行い、進学校にふさわしい部活動を追求する。						
具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準	判 定 基 準	備 考
① 勉強と部活動の両立を図るために効率的な活動を追求し、生徒の学習時間の確保や、部員が勉強に主体的に取り組む姿勢をもつような指導を工夫するよう呼びかける。また、部活動で得た自信を勉学につなげ真の文武両道を目指す。	生徒課 各部顧問	おおむね勉強と部活動が両立できている生徒は多い。一方で、時間の使い方がうまくいかず、どちらも中途半端になり思い悩む生徒も少なくない。	【成果指標】 生徒自身が勉強と部活動の両立ができている。	「勉強と部活動の両立ができている」の問いに対して、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満 昨年度：75.0％	C以下の場合は改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (学校評価生徒アンケート)
② 生徒が自主的に挨拶を行うよう、生徒会等の挨拶運動を継続するとともに、教職員自らが積極的に挨拶を行うことで範を示し、教職員、生徒の自覚をさらに高める。	生徒課 各学年 各部顧問	校内での挨拶、会釈等は確実に増えているが、自主的に挨拶している生徒はまだ少ない。	【成果指標】 生徒が日常の挨拶をしっかりと行っている。	「挨拶はしっかりと行っている」の問いに対して、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：90％以上 B：80％以上 C：70％以上 D：70％未満 昨年度：92.7％	C以下の場合は改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (学校評価生徒アンケート)
③ 本校の「いじめ防止基本方針」に基づき、いじめアンケート、個人面談・保護者懇談や学校行事等の取り組みを確実に実施することで、いじめの予防や、早期発見を行う。	生徒課 教育相談室 保健環境課 各学年 全教職員	日頃の声かけ・目配り・気配りに重点を置き、生徒の様子の変化や問題の早期発見に努めている。相談室や保健室との連携、予防のための取り組みと適切な対応を行っている。	【成果指標】 本校のいじめ予防のための取り組みは、十分成果を上げている。	「いじめ予防や早期発見、早期対策に取り組んでいる」の問いに対して、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える教員が A：95％以上 B：90％以上 C：75％以上 D：75％未満 昨年度：98.4％	C以下の場合は改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (学校評価教員アンケート)
④ 日頃からの生徒観察により、気づいたことを関係者が素早く共有することを全教職員が心がける。またチーム学校として連携し、的確な対応を組織的に行うシステムを構築するとともに外部機関と連携し、心身の調和を基盤とした生徒の人間形成を図る。	教育相談室 保健環境課 各学年	様々な悩みや心身の問題を抱えながら学校生活を送る生徒が増加している。学校、家庭間の連携はもとより、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、発達障害アドバイザー及び外部機関と連携し、そのような生徒に対して、予防や早期対応に組織的に努める必要がある。	【成果指標】 不安やストレスを抱える生徒が、担任、部顧問、養護教諭、教育相談室員、カウンセラーなどに対し、安心して相談できる。相談を受けて、教職員はチームで支援に取り組む。	【生徒アンケート】「2. 先生は生徒理解に務め、生徒個人の悩みにも対応している」の問いに対して「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える生徒が A：95％以上 B：90％以上 C：80％以上 D：70％未満 昨年度：94.2％	C以下の場合は改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (学校評価生徒アンケート)

【重点目標4】 学校組織：業務の効率化を進め、高い専門性と広い見識に基づいた協働的な教育活動を追求する。

具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準	判 定 基 準	備 考
<p>毎月の定時退校日を指定日ではなく、定時退校ウィークという形で設定し、フレキシブルな取得体制とすることで、より一層タイムマネジメントの意識を高めるとともに、ワークライフバランスを推進し、教育活動の質を高める。</p> <p>SSHやSTEAM教育などのプロジェクトを推進することにより、求められる教育のアップデートをはかり、自己研鑽や協働の機運を醸成する。</p>	管理職 全教職員	<p>きめ細かい学習指導や進路指導、生徒指導、部活動指導など教員が担う業務量が多く、かつ多様であることに加え、新たな教育課題により、さらに多忙化が進んでいるため、時間外勤務は決して少なくない。新しく求められる教育改革への適応において、従来の教育手法に単純に積み上げるのではなく、いかに質的に転換していくのかを、引き続き学校全体で模索していく必要がある。</p>	<p>【努力指標】</p> <p>業務の効率化に努め、タイムマネジメントを意識して業務に取り組んでいる。</p> <p>【努力指標】</p> <p>社会の変化を意識して、自己研鑽に励んでいる。</p>	<p>①「効率化やタイムマネジメントを意識した業務の遂行に努めている。」の問いに対して「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える教員が、</p> <p>A：85%以上 B：75%以上 C：60%以上 D：60%未満 昨年度：87.7%</p> <p>②「社会の変化を意識して、新しい教育に意欲的に挑戦している」の問いに対して「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える教員が、</p> <p>A：85%以上 B：75%以上 C：60%以上 D：60%未満 昨年度90.8%</p>	C以下の場合は改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (学校評価教員アンケート)

【重点目標5】 危機管理：防災への備えを高めるとともに、大規模災害を想定した危機管理体制の整備を図る。

具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準	判 定 基 準	備 考
<p>日頃から震災・火災やその他の災害（風水害、学校への犯罪、テロの予告等）に備えて防災講話等の防災教育を行い、災害に対する意識を持たせる。また、避難訓練・防災訓練を行い、災害時に自分自身の身を守る行動がとれるようにするとともに、「共助」の意識の育成を図る。</p>	総務課 各学年	<p>生徒が日常的に災害対策の意識を持ち、災害発生時には迅速に身の安全を図る行動がとれるように、避難訓練、県民一斉防災訓練（シェイクアウトいしかわ）、地震に対する災害訓練といった3つの訓練を行っている。その中で、防災教育という観点での情報を共有し、様々な災害に応じた避難計画を備えた訓練を行っていく必要がある。</p>	<p>【努力指標】</p> <p>日常的に災害対策の意識を持たせ、真剣に訓練に臨み、災害発生時にしっかり身を守る行動がとれるようにする。</p>	<p>①「防災意識が高まり、避難訓練、防災訓練に真剣に取り組んだ。」の問いに対して「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える生徒が、</p> <p>A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満 新しい質問項目</p> <p>②「防災意識が高まり、避難訓練、防災訓練に真剣に取り組ませ、災害発生の折には的確に生徒を誘導、避難させることができる。」の問いに対して「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える教員が</p> <p>A：90%以上 B：80%以上、 C：70%以上 D：70%未満 新しい質問項目</p>	C以下の場合は改善策を検討する。	7月・12月に調査。 (学校評価生徒アンケート、教員アンケート)